

## 答申事由書（案）

- 1 種類 有形文化財（彫刻）
- 2 名称 木造釈迦如来像及十六善神像 附厨子  
（もくぞうしゃかによらいぞうおよびじゅうろくぜんじんぞう  
つけたりずし）
- 3 員数 23 軀 及び 1 基
- 4 所在地 瑞浪市土岐町 5 7 2 8 番地
- 5 所有者の名称 桜堂区
- 6 作者、年代及び由来伝説等 江戸時代（18 世紀前半）

## 7 事由

十六善神は、仏教の経典の一つである大般若経を守護する夜叉神やしやじんの総称で、四天王と十二神将とを合わせた 16 尊から成る。釈迦十六善神、般若十六善神などとも呼ばれ、大般若経を転読する法会だいほんにやえ（大般若会）の際に本尊として祀られる。大般若会が日本各地の寺院で修されるようになった中世以降、各地で絵画または彫刻の十六善神が制作された。

一般的には、釈迦如来を中央に、その周囲に脇侍きょうじと十六善神を配することが多いが、大般若経を伝えた玄奘三蔵げんじょう、また玄奘の守護神である深沙大将じんしゃたいしょう、釈迦の弟子を配するものなど、様々な組み合わせが見られる。

この木造釈迦如来像及十六善神像は、瑞浪市土岐町の桜堂薬師に伝来するもので、木製の厨子内に釈迦如来、脇侍の普賢菩薩・文殊菩薩、十六善神、阿難あなん（又は法涌ほうゆう、常啼じょうてい）、最下部右に玄奘、左に深沙大将の諸像を配する。

像はいずれも一木造り、彫眼で、釈迦如来は彩色等を施さないが、他の像は褐色漆を塗る。高さは十数 cm 程度と小型であるが、細部に至るまで丁寧に彫られており、江戸時代前期から中期にかけての制作と判断される。

厨子は、高さ 62.0 cm、幅 42.5 cm、奥行 31.0 cm で、外部の漆は剥がれているものの、内部の金箔や彩色の遺存状態は良好である。諸像の配置・収納

状態から、当初から諸像を納めるために制作されたものとみられ、その様式や取り付けられた金具の文様などから、江戸時代中期の 18 世紀前半に京都において制作されたものと判断される。

以上から、この木造釈迦如来像及十六善神像は江戸時代の 18 世紀前半に京都において制作されて櫻堂薬師に奉納されたものと解され、それ以降大般若会で用いられたものとみられる。

このように本像は、瑞浪市内では類例の少ない彫刻の十六善神であることに加え、制作場所が推定できる貴重な作例である。また、江戸時代における仏事の変遷や寺院の什物の取得方法などを示す資料として価値が高い。

8 採決年月日

平成 29 年 月 日



- |    |       |    |               |
|----|-------|----|---------------|
| 1  | 釈迦如来  | 13 | 十六善神⑥         |
| 2  | 普賢菩薩  | 14 | 十六善神⑦         |
| 3  | 文殊菩薩  | 15 | 十六善神⑧         |
| 4  | (不明)  | 16 | 十六善神⑨         |
| 5  | (不明)  | 17 | 十六善神⑩         |
| 6  | 韋駄天   | 18 | 十六善神⑪         |
| 7  | 帝釈天か  | 19 | 十六善神⑫         |
| 8  | 十六善神① | 20 | 十六善神⑬         |
| 9  | 十六善神② | 21 | 阿難・法涌・常啼のいずれか |
| 10 | 十六善神③ | 22 | 深沙大将          |
| 11 | 十六善神④ | 23 | 玄奘            |
| 12 | 十六善神⑤ |    |               |